ラクタンティウスと『シビュラの託宣』

Lactance and the *Sibylline Oracles*

伊　藤　博　明*

Hiroaki ITO

１　『シビュラの託宣』の「発見」

古代ギリシア世界に属していた女性の巫女「シビュラ」（Σίβυλλα）を冠した、ギリシア語による書物『シビュラの託宣』（*Oracula sibyllina*）が現在まで伝えられている。標準的なゲフケンによる校訂版（1902 年）には第１巻～８巻、第 11 巻～14 巻、断片１～７が含まれている[1]。この中で第１巻～８巻は６世紀にビザンティンにおいて「序文」を付されて編纂されたものと推測されており、この託宣集は全体として統　された作品ではない。各巻およびその内部のテクストは執筆年代も作者も意図も　様ではなく、研究者の間で多数の議論が存在している[2]。概略的に言えば、第１・２巻はユダヤ教的なテクストがキリスト教的な変容を蒙っている。キリスト教的な視点がより明確なのは第６～８巻であり、これらの巻は２世紀中葉から３世紀初頭に作成されたと考えられている[3]。他方、第３～５巻、および断片はユダヤ人によって書かれたもので、第３巻は紀元前 140 年頃、第４巻は 80 年頃、第５巻は 120 年代にそれぞれ成立している[4]。第 11 巻以降の諸巻はユダヤ教的で、成立は９世紀に下ると見なされている[5]。

後述するように、初期キリスト教教父たちの著作には『シビュラの託宣』からの引用が散見されるのではあるが、中世の著作家たちにおいてこの託宣集が直接的に参照された痕跡は見いだされない。また、中世において作成された幾つものシビュラの託宣集においても、『シビュラの託宣』が利用されたとは考えられない[6]。ゲフケンが校訂版を作成するにあたって用いた写本は 12 あまりで、彼はそれらをオメガ、フィー、プシーの３グループに分けたが、オメガ・グループに 14 世紀のものが二つ見いだされるだけで、他のグループはすべてが 15 世紀に作成されている。そして、おそらくルネサンスの人文主義者たちがこの託宣集に触れる機会はなく、彼らの著作にそれからの直接的な引用は見いだされない。また 15 世紀に託宣集自体が刊行されることもなかった。

ただし例外的に、『シビュラの託宣』第８巻（217-250 行）における、行の最初の文字を繋げると「イエス・キリスト、神の子、救世主、十字架」（ΙΗΣΟΥΣ ΧΡΕΙΣΤΟΣ ΘΕΟΥ ΘΙΟΣ ΣΩΤΗΡ ΣΤΑΥΡΟΣ）[7] となるアクロスティック 34 行が、1495 年にヴェネツィアのアルドゥスによって刊行されている。この著作は　種のギリシア詩選集であり、テオクリトスの『牧歌』など 10 以上の作品を含んでおり、当該の詩句はピュタゴラスの『黄金詩篇』とヘシオドスの『神統記』の間に、「エリュトライのシビュラによる、

＊ いとう・ひろあき
埼玉大学教養学部教授，思想史・芸術論

われらが主イエス・キリストについての詩篇」（Carmina sibyllae erythraeae de Christo Jesu Domino nostro）として収められている[8]。しかしこのアクロスティックは『シビュラの託宣』の写本から採録されたものではない。アルドゥスは典拠について、「これら［詩篇］を、言論における〈王〉と呼ばれた、カイサレイアのエウセビオスが伝えている」と述べている。

カイサレイアのエウセビオス（260/65-339/400）はパレスティナ生まれで、ギリシア語で著述した教父である。彼は『シビュラの託宣』について直接的な知識はもっておらず、『福音の準備』（*Praeparatio evangelica*, IX, 14.3-15.2）における、バビロンの塔の建設に関する『シビュラの託宣』第３巻（97-107）からの引用は、古代ユダヤの歴史家フラヴィウス・ヨセフス（37-93 以降）の『ユダヤ古代史』（*Antiquitates Iudaicae*, I, 117-120）の記述に拠っている。当該のアクロスティックの典拠は、『コンスタンティヌス大帝伝』（*Vita Constatntini*）の第５巻、通称『聖なる集団への勧告』（*Oratio ad sanctum coetum*）、すなわち、コンスタンティヌス大帝が語ったと伝えられる演説に求められる。その第 18 章と第 19 章においてコンスタンティヌスは、キリストの生誕と受難について予言した、エリュトライのシビュラに言及し、その信憑性に関して、キリストの到来より前に、すでにエリュトライのシビュラの託宣を知っていたキケロの名前を挙げている[9]。また彼は、ウェルギリウスの『牧歌』第４歌における、クマエのシビュラによる、神の子の降誕の予言[10]についても触れている。なお『聖なる集団への勧告』は、コンスタンティヌスによっても、またエウセビオスによっても作成されたものではなく、ハイケルは執筆年代を、５世紀の半ばから 630 年頃までと想定している[11]。

このアクロスティックがヨーロッパの中世に流布したのは、アウグスティヌスの『神の国』（*De civitate Dei*）第 18 巻による引用に負うところが大きい。彼によれば、ヘブライ人の国においてホセアの治世が始まっていた頃、「同じ時代に、ある人々が報告するところによれば、エリュトライのシビュラが予言した。　方ウァロは、シビュラは　人ではなく複数いたことを示している。ともかく、このエリュトライのシビュラは、キリストについて明白な事柄を記している」[12]。そしてアウグスティヌスは、フラキヌスという人物によって、エリュトライのシビュラの託宣から、イエスの生誕に関する章句を示される。彼はその部分（アクロスティック）をラテン語訳で引用している。ただしこのラテン語訳では、最後の「十字架」を意味する託宣は省略されて、「イエス・キリスト、神の子、救世主」（Iesus Christus Dei filius salvator）の部分が載せられている。アウグスティヌスが参照した託宣集がいかなるものなのか、『シビュラの託宣』第８巻全体であるか、その　部であるか、また、ラテン語訳が誰の手によるものなのか、等についての議論はいずれも推測の域を出るものではない[13]。しかし、アウグスティヌスが書き記したために、このアクロスティックは中世社会に流布しており、それがアルドゥスの編纂したギリシア語詩の集成に収められた要因であろう。

『シビュラの託宣』が初めて印刷されたのは 1545 年になってからで、編者はアウクスブルクの人文学者クシストゥス・ベトゥレイウス（シクストゥス・ビルク 1501-1554）であった[14]。彼は 1540 年頃から、ラクタンティウスの著作集を刊行する準備を始め、その過程において、ヴェネツィアのギリシア人からアウグスブルクへと送られた写本群の中に、『シビュラの託宣』のギリシア語写本を見いだした[15]。ベトゥレイウスは、自らが編纂した託宣集の「序文」におい

て、その信憑性を疑う者たちに対して、それがキリスト教についての予言と　致することを強調している。彼によれば、「私がシビュラの託宣（χρησμοῖς）のラクタンティウスの証言を集めてみたところ、シビュラたちがキリストについて予言したということを信じることのできない者たちの見解が誤りであることを見いだしました」[16]。『シビュラの託宣』は古代のギリシア・ローマ社会において、いわば「旧約聖書」に照応するものであり、イスラエルの人々が預言者たちから神的な知恵を受け取ったように、異教の者たちはシビュラの予言を通して、神の永遠の意志を学んだのである。

ベトゥレイウスが拠った写本は現在Ｐ写本と呼ばれているもので（Codex Monacensis 351）、フィー・グループに属しており、第１巻から第７巻までが含まれている。ただし、その名称には問題が存している。すなわち、第３番目の巻の冒頭には「第４巻」（λόγος τέτρτος）と、第４番目の巻の冒頭には「第５巻」（λόγος πέμπτος）と（以下同様）記されている。他方、第２番目の巻の冒頭には「第３書」（τόμος τρίτος）という言葉と「第２巻から」（ἐκ τοῦ δευτέρου λόγου）という言葉が見いだされる。この事情は他のフィー・グループの写本においても同様であり、第２巻と第３巻のどちらかが失われた可能性が高い。そこでベトゥレイウスが施した処理は、第１巻の、詩的なテクストが短い編集上の言及によって途切れる部分を境界として、それ以降を、人為的に第２巻を見なすことであった。さらに彼は、第３巻の第１～62 行を ΛΟΓΟΣ Γ（第３巻）と記した上で、第 63 行以下を大きな文字で始めて、それらの間にテクスト上での断絶があることを示唆している。

続く 1546 年に、著名な人文学者のセバスティオン・カスティリオン（カスティリヨ）は、ベトゥレイウスのギリシア語版を刊行したバーゼルの出版者オポリヌスに請われて、『シビュラの託宣』のラテン語訳を上梓し、さらに 1555 年に、新しい版の『シビュラの託宣』をラテン語訳とともに刊行する[17]。カスティリオンは「序文」において、シビュラの託宣の内容の明晰さがキリスト教徒による偽作であることを示しているという、キケロ以来の疑念に対して、その明晰さを擁護している。すなわち、古代の異教徒は、イスラエル人のように曖昧な託宣を解釈するモーセをもたなかったがゆえに、とくに託宣は明晰さを必要としたのであり、もし曖昧なままだったら俗衆の手に落ちて、散逸してしまっただろうと述べている。彼は新版の編集にあたって、イタリア人のギリシア語教師、マルクス・アントニウス・アンティマクスに示唆を得て、現在Ａ写本（Codex Vindobonensis historicus graecus 96, 6）と命名されている、フィー・グループに属するものを利用している。また諸巻の配列については、まず、元来は『シビュラの託宣』に属していたと考えられる、テオフォロス『アウトリュコスに送る』に保存されている断片１・２・３（後述）を載せている。そして、ベトゥレイウスによる最初の書物の、第１巻と第２巻への区分を継承しつつ、第３巻の１～62 行を第２巻の方に組み入れている。この配列は基本的にゲフケンによる現代の校訂版まで採用されている。

なお、『シビュラの託宣』の第９～12 巻については、チューリヒの倫理学と自然学の教授であるコンラート・ゲスナー（1516-1565）が、書誌『普遍的図書館』（1545 年）においてヴァティカン図書館の所蔵の写本について報告している[18]。この写本はおそらく、現在Ｑ写本（Codex Vaticanus 1120）と命名されているもので、オメガ・グループに属している。ただし、この部分が刊行されるのは、イタリアの文献学者アンジェロ・マイ（1782-1854）がヴァティカン図書館でこの写本を再発見したのち、1817 年になって

からのことである[19]。

２　キリスト教教父における言及

以上見てきたように、『シビュラの託宣』のテクストは中世において、そしてルネサンスにおいても1545年までは知られることがなかった。それゆえ、『シビュラの託宣』の伝承は、キリスト教教父の著作における断片的な引用を介して行われたのである。バード・トンプソンの研究によれば、22名の教父たちによって約800行の引用がされている[20]。しかし、その中でも自著において最も利用したのがラクタンティウスであり、彼の『シビュラの託宣』からの引用は57回に及んでいる[21]。中世、そしてルネサンスにおける彼の影響は甚大なものがあるが、彼について考究する前に、３人の著作家について検討しておきたい。

アンティオケイアのテオフィロス（181/88年没）はシリアのアンティオケイア教会の第６代の司教を務めた、ユスティノスと並ぶ護教家である。エウセビオスの『教会史』には４つの著作が挙げられているが、残存しているのは『アウトリュコスに送る』（Πρὸς Αὐτόλυκον; *Ad Autolycum*）全３巻[22]だけである。これは「アウトリュコス」という名の異教徒からの疑問や批判に対して、テオフィロスがキリスト教側から回答して、自らの信仰の正しさを証明するとともに、異教の誤りを糺すものとなっている。書中でローマ皇帝マルクス・アウレリウス（在位161-80年）の死に触れており、執筆年代は80年以降と考えられる。テオフィロスは『シビュラの託宣』から４箇所にわたって引用している。すなわち、現代版における断片１（『アルトリュクスに送る』第２巻36）、断片２（第２巻３）、断片３（第２巻36）、そして、『シビュラの託宣』第３巻97-103, 105行および第８巻５行（第２巻31）である。

テオフィロスにとってシビュラは、「旧約聖書」における預言者といわば同じ立場にあり、「神自身から聖霊を吹き込まれた人」で、「神に教えられ、敬虔にして正しい者となった」[23]者である。ヘブライの預言者も古代ギリシアのシビュラも、神の道具となり、神から付与された知恵によって、世界の創造やその他のあらゆることについて語った。「しかしヘブライ人のあいだには　人や二人ではなく、もっと多くの預言者がさまざまな時代や時期に生まれ、ギリシア人の間にはシビュラが生まれたのである」[24]。彼らの予言が過去において成就したことを、そして将来の事柄についても成就するだろうことをわれわれは確信している。

テオフォロスは第２巻31において、ユダヤ民族の「自分たちに栄えある名声を得ようとした」塔の建設と、その結果として、神によってもたらされた言語の混乱（『創世記』７）に関して、「シビュラも怒りが世界に来るであろう」と予言した言葉を伝えている。

> しかし、大いなる神の脅しが極みに達するとき、
> かつてこの脅しによって神は死すべき者どものを恐れさせたが、このたびは人々がアッシリアの地に塔を建て、皆が同じ言葉で話し、
> 星の輝く天に昇りたいと思ったときであった。
> そのときただちに不死なる方は大いなる力を風に加えられた。
> するとたちまち風は大きな塔をまっさかさまに投げ倒し、
> 死すべき者どもの中に争いを惹き起こした（『シビュラの託宣』第３巻97～103行）。
> そして塔が倒れるや否や、人間の言葉は

（第３巻 105 行）

死すべき者どもの多くの言語へと分かれた（第８巻５行）[25]。

『シビュラの託宣』第３巻の 104 行は「それゆえに死すべき者どもはその町をバビロンの名づけた」と語られており、また、106 行以降は「あらゆる種類の言語へと分かれた」[26] と続いている。そして、第８巻４行には「そして塔が倒れたあとで、人間の言葉は」[27] と、第３巻 105 行ときわめて類似した表現が見いだされる。こうした事情を鑑みると、テオフォロスが『シビュラの託宣』第８巻を知っていて、そこから１行だけを引用した可能性は低く、むしろ当該の「死すべき者どもの多くの言語へと分かれた」は、元来は第３巻に入っていたと、あるいは、第３巻の 105～106 行がのちに第８巻へと転用されたと考えるべきであろう[28]。

他方、カスティリオン以降の編集者によって『シビュラの託宣』に属するものと見なされ、ゲフケン版にも断片１・２・３として収録されている託宣の由来については研究者の間でも議論がある。断片１は「シビュラはギリシア人や他の民族の中に現れた預言者であったが、その予言の初めで人間の種族を非難して言っている」という文言で導入された、35 行からなる託宣であり、すぐに「そして造られたと言われる神々についてシビュラは語った」と述べられて、50 行にわたる託宣が続いている。ゲフケン、そし近年ではフォルストは、テオフォロスもしくは、彼が依拠した託宣集の著者が、これらの託宣を創出したと考えている[29]。ボイテンヴェルフは、「その予言の初めで」（ἐν ἀρχῇ τῆς προφητείας αὐτῆς）[30] という言葉に注目して、「あるシビュラの書物」（a Sibylline book）を参照したと判断した[31]。ロバート・グラントはさらに、これらの託宣が本来は第３巻の冒頭にあったもので、そこからテオフィロスは引用したと推測している[32]。テオフィロスが自著においてシビュラの託宣を捏造する必然性はなく、また断片１・２・３が内容的にも形式的にも『シビュラの託宣』第１～８巻と齟齬があるわけではない。したがって、諸断片は元来の『シビュラの託宣』と関係が深いものであり、失われた巻に属するものと、あるいは既存の巻（おそらく第３巻）から抜け落ちて除かれたものと見なしてもよいであろう。

アレクサンドレイアのクレメンス（150 頃-215 年頃）は、アテナイ生まれであるが各地を遍歴して学問を修め、アレクサンドレイアで教育活動に従事していた。202 年頃に司祭となっていたが、202 年のセウプティミウス・セウィルス帝による迫害を逃れてカッパドキアのカイサレイアに避難し、同地で没したと考えられている。残存している著作としては『ギリシア人への勧告』（*Protrepticus*）、『教育者』（*Paedagogus*）、『ストロマテイス』（*Stromata*）が挙げられ、それらを通して、『シビュラの託宣』から 10 ほどの引用が確認されている。クレメンスは、シビュラとモーセを、オルペウスや他のギリシアの賢者と詩人より古い者と位置づけている[33]。また『シビュラの託宣』断片１の 28-35 行を引用して、シビュラを神の預言者の最初の者と呼んでいる[34]。また、偽書の『ペトロのケリュグマ（宣教）』の　説を引用しながら、使徒パウロにシビュラについて語らせている。それによれば神は預言者を通してユダヤ人を救済することを意図したが、同様にギリシア人に対しては、神の祝福を受けるに相応しい者たちを取りあげて、俗衆とは区別した。

使徒パウロはこのことを『ペトロのケリギュマ』において明らかにし、次のように述べている。「またギリシア語の書物をとっ

て、シビュラから、いかに彼女が　なる神と起こるべき事柄を啓示したのかを知りなさい。……」[35]

この文脈では、あたかもパウロが異教徒の聴衆を前にして、シビュラの託宣を読むように勧めているような印象を受ける。すなわち、シビュラは異教の地において、イエスの出現とその本性について予言した者と理解しうるのである。クレメンスによる『シビュラの託宣』から引用している典型的な箇所は『ギリシア人への勧告』に見いだされる[36]。

あなたの教育者として私は、予言者シビュラを引くことにしよう。「私は嘘つきのポイボスの予言者ではない。その者を、愚かな人々は神と言い、偽って予言者と呼んだ。そうではなく、私は大いなる神の予言者である。この方は、石から彫った、物言わぬ偶像のように人間の手で作られたのではない」[37]。しかし彼女は、神殿を廃墟と呼んでいる。エペソのアルテミスは、彼女の予言するように、「地割れと地震とによって」[38] 飲み込まれるだろう。「エペソは岸辺で泣きながら、悲嘆にくれ、もう住む人のいない神殿を探し求めるのである」[39]。彼女が述べるように、イシスとセラピスの神殿は倒され、燃え上がるだろう。「イシス、三重に惨めな女神よ。おまえはナイルのほとりに、ただひとりで留まるだろう。アケロンの砂浜に（立つ）、言葉もなく狂える女よ」[40]。それから低くせよ。「また汝、多くの削られていない石を負わせられたセラピスよ、三重に惨めなエジプトにおける最も激しい災疫が（お前のために）備えられるだろう」[41]。

クレメンスは断片も１についても『ストロマテイス』において３回引用しており、またおそらくは、『シビュラの託宣』の第３・４・５巻を知っていた。このことから、断片、第３・４・５巻の成立年代は３世紀の初頭以前と推測しうるのである。

『ストロマテイス』から遅れて３世紀の後半、もしくは４世紀の初頭に成立したと考えられている作品に、殉教者ユスティノス（100 頃-165 頃年）に帰されてきた文書『ギリシア人への勧め』（*Cohortatio ad Graecos*）がある。ユスティノス自身も『第　弁明』（*I Apologia*）の第 20 章において、『シビュラの託宣』第４巻（160 行以下）を想い起こさせつつ、「シビュラもヒュスタスペスも、朽つべきものに対する、火の焼尽が起こるであろう言いました」[42] と述べている。ただし、『ギリシア人への勧め』は純然たる偽書であり、そこには『シビュラの託宣』からの引用が４度、ほかにシビュラへの言及は３度見いだされる。

擬ユスティノスは『ギリシア人への勧め』において三つの章句を引いている。彼によれば、プラトン、アリストテレス、そして多くの著作家たちが、古代のシビュラを女性の予言者として語っており、「その託宣において、彼女はあなたに唯　なる神のことを教えるであろう。ここで彼女があなたに教えること引き合いに出すべきだろう。これが彼女が述べていることである」[43]。そして断片１から、「ただひとり支配したもうただひとりの神は超越し、生まれがなく、全能であって、自らすべてを見そわしながら（人間からは）不可視である。彼自らはいっさいの死ぬべき肉によって見られることがないからである」[44] を引用したのちに、続いて『シビュラの託宣』第３巻（721-723 行）と第４巻（24-30 行）を引用している。

『ギリシア人への勧め』において興味深いこ

とは、シビュラの託宣がすべて、　人のクマエのシビュラに帰せられていることである。ウェルギリウスの『アエネイス』で有名なシビュラの名前を常に参照することで、彼女の証言の信頼性を増そうと意図したのであろう。擬ユスティノス自身がクマエ（ナポリ近郊）への旅を企てており、その途中において、シビュラの託宣の　節「最初の人間を造り、アダムと呼んだ者」（ὃς πρῶτον πλάσας μερόπων, Ἀδὰμ δὲ καλέσσας）[45] という表現が現れるが、これは、『シビュラの託宣』第３巻（24-25 行）の「まさに彼が、４文字のアダムを、最初に造られた者を造った神自身である」（αὐτὸς δὴ θεός ἐσθ’ὁ πλάσας τετραγράμματον Ἀδάμι τὸν πρῶτον πλασθέντα）[46] を下敷きにして作成されている。

３　ラクタンティウスにおける受容

ルキウス・カエリウス・フィルミアヌス・ラクタンティウス（250 頃-325 年頃）は、アフリカ出身の護教家であり、ヒエロニュムスの『著名者列伝』第 80 章によるならば、修辞学者アルノビウスに師事して学んだのち、290 年頃にディオクレティアヌス帝の命によって新都ニコデメイア（現在トルコのイズミト）に移り修辞学を教えた。300 年頃にキリスト教に入信したラクタンティウスは、303 年の帝によるキリスト教徒の迫害に会う。ニコメディアで後のコンスタンティヌス大帝と知り合っており、大帝のキリスト教への改宗には、ラクタンティウスの影響があったという議論もある。晩年は、大帝から要請されて、アウグスタ・トレウェロルム（現在のトリーア）で、大帝の長子クリスプスの家庭教師を受け持った。哲学的・神学的著作としては、『神の業について』（*De opificio Dei*）、『神学教理』（*Divinae institutiones*）、『神学教理概観』（*Epitome Divinarum institutionum*）、『迫害者たちの死について』（*De moribus persecutorum*）、『神の怒りについて』（*De ira Dei*）[47] がある。

ラクタンティウスの『シビュラの託宣』からの引用は広範囲に及び、全部で 57 の引用が数えられている。その内訳は、『シビュラの託宣』第３巻からは 20 の引用で、そのうち 16 の引用についてはエリュトライのシビュラの名前が冠されている。次に第７巻からから 11 の引用が、第４～７巻から７つの引用が見られる。加えて、テオフィロスの『アウトリュコスに送る』（第２巻 36）にある断片１および３から６つの引用があり、さらにラクタンティウスによってにのみ伝えられていると考えられる断片が４つ（ゲフケン版断片４～７）が存在している。

ギリシア・ローマにおける複数のシビュラについて、ラクタンティウスはマルクス・テレンティウス・ウァロ（前１世紀）の、散逸した『人間と神々に関する故事』（*Antiquitatum rerum humanarum et divinarum libri XLI*）に見える貴重な情報を伝えている。『神学教理』第１巻６章ではまずウァロによる、シビュラの語源の説明を紹介している。

> 古代の人々によって、女性の予言者はすべてシビュラと――デルポイのシビュラという唯　の名にゆえに、あるいは神々の告げる意図のゆえに――呼ばれていたからである。実際、アエオリア方言では、神々のことを「テオス」（θεούς）ではなく「シオス」（σιούς）と、意図のことを「ブーレー」（βουλής）ではなく「ブッラ」（βούλλαν）と呼んでいる。それゆえ、シビュラとはいわば「神意」（θεοβούλην）ということなのである[48]。

続いて、十人のシビュラのリストを、それらに言及している著作家とともに、ウァロから引

用している。すなわち、(1)ペルシアのシビュラ、(2)リビアのシビュラ、(3)デルポイのシビュラ、(4)キメリアのシビュラ、(5)エリュトライのシビュラ、(6)サモスのシビュラ、(7)クマエのシビュラ、(8)ヘレスポントスのシビュラ、(9)ピュリギアのシビュラ、(10)ティブルのシビュラ、である[49]。この中でもクマエのシビュラについて、ウァロは彼女が託宣集をローマにもたらした逸話を紹介している。クマエのシビュラは全９巻からなる託宣集をタルクィニウス・プリスクス王のもとに運び、金300ピリッポスを要求したが、王は法外な値段に驚いて拒否した。そこでシビュラは３巻を燃やして、残りの諸巻に対して同　の金額を要求した。王は彼女が「さらに狂気に陥った」と考えて拒否すると、シビュラはまた３巻を燃やして同額を主張すると、王は「動転して」残りの３巻を買い取ったと述べられている。この逸話は、プリニウス（23頃-79年）の『自然誌』（*Historia naturalis*）第13巻88章や、ハルカリナッソスのディオニュシオス（前１世紀）の『古代ローマ史』（*antiquitates Romae*）第４巻62章でも伝えられている[50]。

この逸話の真偽は別にしても、古代のローマではシビュラの予言集が蒐集されて、カピトリウムの丘のユピテル神殿に保管された。そして、天変地異、疫病の発生、戦争の勃発など有事の際に参照された。予言集を管理する神官団が組織され、最初は２人（Duoviri）であったが、前４世紀には10人（Decemviri）に、そして前１世紀以降は15人（Qindecemviri）に増員された。ラクタンティウスによれば、各シビュラの託宣はカピトリウムにもたらされたが、それらは混合されたので、エリュトライのシビュラを例外として、互いに区別なく「シビュラの託宣」と呼ばれた。たしかにすべてのシビュラが「唯　の神」について予言しているが、その中でもエリュトライのシビュラが「著名で高貴」であり、カピトリウムが再建されると、執政官Ｃ・クリオ（前76年に在位）の建議によって、エリュトライに使節団が送られて託宣が蒐集された。彼らがローマにもたらした詩行の中には、「唯　なる神についての証言」が含まれている。そして、ラクタンティウスは『シビュラの託宣』から４つの託宣を引用している。

> 「唯　支配する、　人の神は途方もなく巨大で、生みだされた者ではない」[51]。これは唯　の至上の神であり、彼は天を造り、天体によって識別した。「唯　の神だけが最も高く、天と太陽と星辰と月と、実りを結ぶ大地と海の水の大波を造った」[52]。彼は世界の唯　の建造者で、諸事物の唯　の製作者であり、諸事物は彼によって存続し、彼の内に存在しているのであるから、彼だけを崇拝しなければならない、と彼女は証言している。「唯　の者である彼を、世界の支配者を崇めよ。彼だけが永遠から出て、永遠に向かって存在している」[53]。同様に別のシビュラ――誰かは分からないが――は、神の言葉を人間にもたらしたと確言してこう述べている。「というのは、私が唯　の神であり、他の神は存在しないからだ」[54]。[55]

ラクタンティウスは、最初に、エリュトライのシビュラによる託宣として、断片１の７行目、断片３の３～５行目、断片１の15～16行目を引用し、最後に「別のシビュラ」の託宣として第８巻377行目を引用している。ここで問題となるのは、ラクタンティウスは断片１および２の引用にあたって、テオフィロスに拠っていたのか、あるいは両者が知っていた別の託宣集に拠っていたのか、という点である。別の託宣集という場合でも、ラクタンティウスが示唆してい

るように「エリュトライのシビュラ」の名前を冠したもの（テオフィロスは「シビュラ」としか記していない）、または第８巻の「原本」と考えられるもの、さらにはまったく別種の託宣集が存在した可能もある（もちろん、ラクタンティウスとテオフィロスが同　の託宣集を参照していたという確証も存在しない）。すでにいくつかの推論も立てられているが[56]、以下、可能性の大枠を画定しておきたい。当該の箇所について、ラクタンティウスとテオフィロスのギリシア語テクストを比較すると、両者が異なっているのは最初の断片１からの引用だけである。

Frg. 1, 7.

(Lactantius): εἷς θεός, ὃς μόνος ἄρχει,
ὑπερμεγέθης ἀγένητος.

(Theophilus): εἷς θεός, μόνος ἄρχει,
ὑπερμεγέθης ἀγένητος.

テオフィロスのテクストは、10 世紀のヴァティカン写本をもとに伝承されており、またこの章句には意味上の差異はなく（あえて訳するならば「　人の神が、唯　支配し……」）、『神学教理』第１巻６章に見るかぎりでは、ラクタンティウスがテオフィロスに従っていた可能性がある。『神学教理』ではテオフィロスの名前が度挙げられており（第１巻 23 章２）、彼が『アウトリュコスに送る』を読んでいたと考えられる。

ラクタンティウスが他に断片を引用しているのは、『神学教理』第４巻６章においてである。ここで彼は、イエスが「至上の神の子であり、最大の権能を賦与された者」であることが、預言者だけではなく、またヘルメス・トリスメギストスの予言やシビュラたちの予言によって確証されていると述べ、まず「ヘルメス文書」の『完全な教え』から引用したのちに、次のように続けている。

> エリュトライのシビュラは、至上の神から始めた詩篇の冒頭において、神の子が万人の指導者であり支配者であることを、以下の詩行によって予言している。「万有を養う者、創出する者は、甘美な霊を万有に降して、神を万人の導き手とした」[57]。そしてまた、彼女は最後に予言している。「神は別の者を、忠実な者たちに対して、自らを称える者として与えた」[58]。そして別のシビュラは次のことを知るべきであると命じている。「神の子自身が汝の神であることを知りなさい」[59]。

ラクタンティウスの託宣の引用は、最初が断片１の５～６行目、次が第３巻の 774 行目、最後が第８巻の 329 行目である。この断片１については両者のテクストにいくつかの相違が見られる。

Frg.1, 5-6.

(Lactantius): παντοτρόφον κτίστην, ὅστις
γλυκὺ πνεῦμα ἅπασιν
κάτθετο χὴγητῆρα θεὸν πάντων
ἐποίησεν.

(Theophilus): παντοτρόφον κτίστην, ὅστις
γλυκὺ πνεῦμ’ ἐν ἅπασιν
κατέθετο[60] χὴγητῆρα βροτῶν
πάντων ἐποίησεν.

このように２行の内で３箇所の相違が見いだされ、とくに θεὸν と βροτῶν の相違は看過しえない。テオフィロスでは、「万有を養う者、創出する者は、甘美な霊を万有の中に降して、すべての死すべき者たちの導き手とした」と訳出できる。またこの３箇所について、テオフィロスの

テクストと　致する、ラクタンティウスの写本は存在しない。以上の比較からだけでは結論を出すことはできないが、少なくともラクタンティウスの典拠をテオフィロスと断定することは困難であろう。

他方、ラクタンティウスに特徴的なことは、『シビュラの託宣』の断片を引用している箇所では必ず「エリュトライのシビュラ」の言葉として引用していることである。上記の２箇所の他にも、『神学教理』第１巻８章、第２巻 10 章、『神の怒りについて』第 22 章が挙げられる。また『神学教理』第４巻６章では、断片と『シビュラの託宣』第３巻からの引用が、あたかも同じエリュトライのシビュラの託宣に属しているように語られ、続いて「別のシビュラ」の託宣として第８巻から引用されていることも興味深い。『神の怒りについて』第 22 章では、「エリュトライのシビュラの託宣の中に、事物の創設者である至高の神についての次のような箇所が見いだされる」として、断片３（17-19 行）の「天空を住処とする不滅、永遠の創造主……」が引用され、続いて「また、別の箇所で神を最も激しく刺激する悪事を列挙しながら次のように言っている」として、『シビュラの託宣』第３巻（763-766 行）の「不法な崇拝から遠ざかり、生ける神に仕えよ……」が引用されている[61]。さらに、先の『神学教理』第４巻６章には、「エリュトライのシビュラは、至上の神から始めた詩篇の冒頭において」（Sibylla Erythraea in carminis sui principio）と、彼女の名前を冠した託宣集の存在をうかがわせるような表現が見られている。このような事実から、ラクタンティウスが参照した文書のひとつは、『シビュラの託宣』の断片と第３巻が含まれたもので、それは、エリュトライのシビュラに帰されていたと推測することが可能であろう。

ラクタンティウスにおける『シビュラの託宣』の利用について特徴的な点は、それからの引用が他の護教家・教父に比べて格段に多いことのみならず、自らの議論の中において積極的な役割を演じていることである。すでにルネ・ピションによる古典的研究において指摘されているように[62]、『神学教理』第１・２巻においては、神の唯　性、神による世界創造、人間と神との類似などについて『シビュラの託宣』からの引用があったが、第４巻においては、イザヤ、ダビデ、エレミヤの預言と、あるいは新約聖書の記述と対応するように、イエス・キリストに関する託宣が採りあげられる。託宣の選択は熟考されたと思われ、それらは読者に対して強い印象を与えている[63]。

アウグスティヌスは『神の国』第 18 巻 23 章において、エリュトライのシビュラ、またクマエのシビュラの名を挙げながら、シビュラが「神の国に属するもの者たちの中に挙げられるべきである」[64] と述べたうえで、ラクタンティウスに言及して、『神学教理』で引用されている託宣を以下のように、　つにまとめる作業をおこなっている[65]。

> そののち彼は、不信なる者たちの不義なる手に陥る。彼らは、神に対して穢れた手で打ちすえ、汚れた口から毒に満ちた唾を吐く。だが彼は、ただ鞭に聖なる背中を晒す。そして、打たれながら黙する[66]。それは、彼が冥府にいる者たちに語り、棘のある冠を被されたために、「ことば」として来たことも、どこから来たかも人に知られないためである[67]。彼らは、食物として胆汁を、喉の渇きには酢を与えた。このようにもてなしの悪い食卓を供する[68]。おまえは愚かにも、死すべき者の心を嘲るおまえの神を分からず、棘のある冠を載せ、苦い胆汁を混ぜた[69]。ところで、神殿の帳は裂け、昼

の最中に三時間も闇に包まれて夜になる[70]。そして彼は、三日の眠りを引き受けて死んだままとなる。それから彼は、冥府から戻った最初の者として、呼び戻された者たちに復活の始まりを示しつつ、光のもとへやってくる[71]。

こうして、全体としてイエスの受難と復活を予言する託宣は、アウグスティヌスによって、エリュトライの、あるいはクマエのシビュラの託宣として中世に伝えられた。

続いて、『神学教理』第7巻においてラクタンティウスは、すでに成就された予言ではなく、将来に対する予言、すなわち黙示論的なヴィジョンを語るものとして、託宣を利用している。たとえば7巻24章では「最後の審判」について次のように語られている[72]。

至上で至高の神の子が、生者と死者を裁くためにやってくる――シビュラが次のように述べて証しているように。「全能者ご自身が来て、生者と死者の魂と、全世界とを法座でお裁きになるとき、そのとき、全地の人々の間で混乱がおこるであろう[73]。彼が不正義を滅ぼし、至高の裁きをおこなって、最初から正しい義人に生を回復すると、彼は　千年の間、人間とともに暮らし、最も義しい支配をおこなうだろう[74]。このことを別のシビュラが狂乱のままで予言して述べている。「聴け、死すべき者たちよ、永遠の王が支配する」[75]。

第7巻における『シビュラの託宣』からの引用は、第３・４・５・８から計16回に及び、当該巻の記述に大きな役割を演じている。以上のように、『シビュラの託宣』の内容の　部とともに、異教の地においてユダヤ＝キリスト教的な予言を行った女性というシビュラ像を中世に伝えるのに最も功績があったのは、ラクタンティウスの『神学教理』を始めとする諸著作であった。

15世紀のイタリアにおいて、ラクタンティウスは再び『シビュラの託宣』の流布にとって重要な役割を演じることになる。マインツ生まれのグーテンベルクが考案した印刷術と印刷機は、二人のドイツ人修道士アルノルト・ペンナルツとコンラート・シュヴァインハイムによってイタリアの中部の町スビアーコにもたらされた。当地のベネディクト派修道院において、1465年に印刷されたイタリア最初の書物は、ドナトゥスのラテン語教科書であった。同年に刊行されたのが、キケロの『弁論家について』とラクタンティウスの『著作集』、そして、1467 年に印刷されたのがアウグスティヌスの『神の国』である[76]。インクナブラ（15世紀に刊行された書物）は400点に満たないが、その中で『弁論家について』は12版、『著作集』は14版、『神の国』は16版を数えた。

イタリアの人文主義者は、アウグスティヌスと並んで、ラクタンティウスを高く評価した。たとえば、フィレンツェの新プラトン主義的哲学者マルシリオ・フィチーノは、1471年に執筆した『キリスト教について』（*De christiana religione*）に、第24章「シビュラの権威」と第25章「キリストに関するシビュラの予言」という二つの章を含めている[77]。これらの章の記述がラクタンティウス『神学教理』に拠っていることは明らかである。第24章ではウァロによる10人のシビュラのリストを挙げ、ウェルギリウスの『牧歌』第4章の解釈に触れており、第25章は『神学教理』から「神の子キリスト」についての証言が集められている。ここでフィチーノは、『神の国』の記述を参照しながらも、自ら『神学教理』に見られる託宣を抜粋して、キリ

ストに関する予言を再構成している。美術史の上でも、ラクタンティウスの託宣は、シエナ大聖堂の舗床に 1482 年から翌年にかけて描かれた 10 体のシビュラ像に添えて記されている[78]。

註

1 Joh. Geffcken (ed.), *Die Oracula Sibyllina*, GCS 8, Leipzig, 1902. ゲフケン以降の校訂版としては以下がある。A. Kurfess, *Sibyllinische Weissagungen*, Berlin, 1951.

2 『シビュラの託宣』全体のサーヴェイと研究文献については以下を見よ。John J. Collins, "The Development of the Sibylline Tradition," in W. Hasse - H. Temporini (ed.), *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, II 20.1, Berlin - New York, 1983, pp.421-453.

3 これらの諸巻については邦訳がある。『シビュラの託宣』、佐竹明訳、『聖書外典偽典』６、教文館、1976 年に所収。第３巻についての最近の詳細な研究としては以下がある。Rieuwerd Buitenwerf, *Book III of the Sibylline Oracles and its Social Setting with an Introduction, Translation, and Commentary*, Leiden - Boston, 2003.以下も参照。V. Nikiprowetzky, *La troisième Sibylle*, Paris, 1970; Idem, "La Sibylle juive et le 'Troisième Livre' des Pseudo-Oracles sibylllins depuis Charles Alexandre," in W. Hasse - H. Temporini (ed.), *Aufstieg und Niedergang der römischen We*lt, II 20.1, Berlin - New York, 1983, pp.460-542; J. Collins, *The Sibylline Oracles of Egyptian Judaism*, Montana, 1974.

4 これらの諸巻については邦訳がある。『シビュラの託宣』、柴田有訳、『聖書外典偽典』３、教文館、1975 年に所収。第１・２巻についての最近の詳細な研究としては以下がある。J.L. Lightfoot, *The Sibylline Oracles with Introduction, Translation, and Commentary on the First and Second Books*, Oxford, 2007.

5 第 13 巻については以下の研究がある。D.S. Potter, *Prophecy and History in the Crisis of the Roman Empire. A Historical Commentary on the Thirteenth Sibylline Oracle*, Oxford, 1990.

6 中世の託宣集については以下を参照せよ。E. Sackur, *Sibyllinische Texte und Forschungen*, Halle, 1898; B. Bischoff, "Die latenischen Übersetzungen und Bearbeitungen aus den *Oracula Sibyllina*," in J. Lebon (ed.), *Mélanges Joseph de Ghellinck, S.J.*, Vol.1, Gembloux, 1951, pp.121-147; Paul J. Alexander, *The Oracle of Baalbek. The Tiburtine Sibyl in Greek Dress*, Washington, D.C., 1967; Bernard McGinn, "*Teste David cum Sibylla*: The Significance of the Sibylline Tradition in the Middle Ages," in J. Kirshner and S.F. Wemple (eds.), *Women of the Medieval World. Essays in Honor of John H. Mundey*, Oxford, 1985, pp.7-35. 伊藤博明「ティブルのシビュラ　　中世シビュラ文献の紹介と翻訳」（１）、『埼玉大学紀要（教養学部）』、Vol.45, No.1 (2009. 9) ,p.1- 12.

7 Ed. Geffcken, pp.156-157. 邦訳、347-348 ページ。

8 *Theocriti Eclogae triginta. Genus Thocriti et de inventione bucolicorum*…. Venezia: Aldus Manutius, 1495. Cf. Goff T144; IGC 9497; it00144000; BSB-Ink T-148; GW M45831.

9 キケロは『ト占論』（*De divinatione*）第２巻 54 章において、ローマ人における「シビュラの託宣」について言及している。ただし、エリュトライの名前は挙げられておらず、またキケロは「シビュラの託宣」の信憑性については疑問視している。

10 Vergilius, *Bucolica*, IV. 小川正廣訳、『牧歌／農耕詩』、京都大学学術出版会、2004 年、28-32 ページ。この箇所についての議論は以下のバンコによるサーヴェイと参考文献を参照されたい。Stephen Benko, "Virgil's Fourth Eclogue in Christian Inetpretation," in Wolfgang Haase (ed.), *Aufstieg und Niedergang der römischen We*lt, II.31.1, Berlin - New York, 1981, pp.646-705.

11 I.A. Heikel (ed.), *Eusebius Werke*, Bd.1, Leipzig, 1902, pp.xcvii-cii. Cf. R. Lane Fox, *Pagans and Christians*, New York, 1987, pp.647-653.

12 Augustinus, *De civitate Dei*, XVIII, 23, ed. B. Domber A. Kalb, CC 48, 1955, p.613. 邦訳としては以下がある。大島春子・岡野昌雄訳、『神の国』(4)、「アウグスティヌス著作集」14、教文館、1980 年；服部英次郎・藤本雄三訳、『神の国』(4)、岩波文庫、1986 年。

13 Cf. Pierre Courcelle, *Les lettres grecques en Occident, de Macrobe à Cassiodore*, Paris, 1943, p.77; Henri-Irénée Marrou, *Saint Augustine de la fin de la culture antique*, Paris, 1938, p.36; *Oeuvres de Saint Augustin* 36: *La Cité de Dieu,* Livres XV XVIII, ed. par B. Combart et A. Kalb, Note par G. Bardy, Paris, 1960, pp.755-759.

14 Xystus Betuleius, Σιβυλλιακῶν χρησμῶν λόγοι ὀκτώ, *Sibyllinorum oraculorum libri octo*, multis hucusque seculis abstrusi, nuncque primum in lucem editi; adiecta quoque sunt Lactantii excerpta de his testimonia, cum Annotationibus, Basel, 1545. ベトゥレイウス、および彼と『シビュラの託宣』については以下を参照。H. Hartmann, "Sixtus Birk, ein Humanist und Dramatiker des 16. Jahrhunderts," in H. Patzer - H. Güthert (*et al*. eds.), *Beiträge zur Geschichte der Universität Erfurt (1392-1816)*,

15, Erfurt, 1970, pp.43-57; P.G. Bietenholz, "Sixt Birk," in idem (ed.), *Contemporaries of Erasmus*, vol.1, Toronto, 1985, pp.150-151; Anthony Grafton, "Highter Criticism Ancient and Modern: The Lamentable Deaths of Hermes and the Sibyls," in A.C. Dionisotti, Anthony Grafton and Jill Kraye (eds.), *The Uses of Greek and Lain. Historical Essays*, London, 1988, pp.155-170; Idem, *Defenders of the Text. The Traditions of Scholarship in an Age of Science, 1450-1800*, Harvard, 1991, pp.172-174.

15 Cf. Buitenwerf, op.cit., p.6.

16 "Betuleii epistola nuncupatoria ad editionem principem," in C. Alexandre (ed.), *Oracula Sibyllina*, vol.1, Paris, 1841, p.vi.

17 Castillio, Σιβυλλιακῶν χρησμῶν λόγοι ὀκτώ, *Sibyllinorum oraculorum libli VIII*, Basel, 1555. Cf. M. Bracali, "Il filologo ispirato Sebastiane Castellione e l'edizione dei Sibyllina Oracula (Basilea 1555)," *Rinascimento*, 36 (1996), pp.319-349; Buitenwerf, op.cit., pp.8-10; Anthony Grafton, "Highter Criticism Ancient and Modern," cit.

18 Conrad Gesner, *Bibliotheka universalis*, Zürich, 1945, p.598. Cf. Buriterwerf, p.8.

19 Angelus Maius, *Scriptorum veterum nova collectione Vaticanis codicibus edita*, vol. 3.3., Roma, 1828.

20 Bard Thompson, "Patristic Use of the Sibylline Oracles," *Review of Religion*, 16 (1952), pp.115-136.

21 Cf. Marie-Louise Guillaumin, "L'Exploitation des *Oracles Sibyllins* par Lactance et par le *Discours à l'assemblée des saints*," in J. Fontaine - M. Perrin (ed.), *Lactance et son temps*, Paris, 1978, pp.189-200.

22 Théphile d'Antioche, *Trois libres à Autolycus*, ed. par G. Bardy, tr. par Jean Sender, introd. et notes per Gustave Bardy, SC 20, Paris, 1948; Theophilus of Antioch, *Ad Autolycum*, ed. and trans. by Robert M. Grant, Oxford, 1970. 『アウトリュコスに送る』、今井知正訳、『初期ギリシア思想』「中世思想原典集成」１、平凡社、1995 年、99-195 ページ。

23 *Ad Autolycum*, II, 9. 邦訳 127 ページ。

24 Ibid., 邦訳 126-27 ページ。

25 邦訳、147-48 ページ。原文は以下のとおり。'Ἀλλ' ὁπόταν μεγάλοιο θεοῦ τελέωνται ἀπειλαί, / ἃς ποτ'ἐπηπείλησε βροτοῖς, ὅτε πύργον /ἔτεθξαν / χώρῃ ἐν Ἀσσθρίῃ. ὁμόφωνοι δ'ἦσαν ἅπανρες, / καὶ βούλοντ' ἀναβῆναι εἰς οὐρανὸν ἀστερόεντα. / αὐτίκα δ'ἀθανάτος μεγάλην ἐπέθηκεν ἀνάγκην / πνεύμασιν. αὐτὰρ ἐπειτ'ἄνεμοι μέγαν ὑψόθι πύργον / ῥίψαν καὶ θνητοῖσιν ἐπ'ἀλλήλοις ἔριν ὦρσαν, / εἰς πολλὰς θνητῶν ἐμερίσθησαν διαλέκτους'(ed. Grant, p.78).

26 'παντοδαπαῖς φωμαῖσι διέστρεφον, ...' ed. Geffcken, p.54.

27 'ἐξότε δὴ πύργος τ' ἔπεσεν γλπῶσσαί τ'ἀνθρώπον'. ed. Geffcken, p.142.

28 Cf. Buitenwerf, op.cit., p.74.

29 Geffcken, *Komposition und Entstehungszeit*, pp.69-75; N. Zeegers-Vander Vorst, *Les citations des poètes grecs chez les apologistes chrétiens du IIe siècle*, Leuvain, 1972, pp.138-141.

30 *Ad Aucolycum*, II, 36, ed. Grant, p.86.

31 Buitenwerf, op.cit., p.74.

32 Theophilus, *Ad Autolycum*, ed.Grant, p.89, note 1.

33 Clemens Alexandrianus, *Stromata*, I, 21, 108, ed. Otto Stählin, Leipzig, 1906, p.69.

34 Clemens Alexandrianus, *Protrepticus*, VIII, 77, 1-3, ed. Otto Stählin, Leipzig, 1905, p.59; ed. M. Marcovich, Leiden New York, 1995, pp.117-118.

35 Clemens Alexandrianus, *Stromata*, VI, 5, 41, ed. Stählin, p.451.

36 Clemens Alexandrinus, *Stromata*, VI, 50, 1-4, ed. Stählin, p.465.

37 *Oracula Sibyllina*, IV, 4-7. 邦訳、『聖書外典偽典』３、179 ページ。

38 *Oracula Sibyllina*, V, 294. 邦訳、『聖書外典偽典』３、195 ページ。

39 *Oracula Sibyllina*, V, 296-297. 邦訳、『聖書外典偽典』３、195 ページ。

40 *Oracula Sibyllina*, V, 484-485. 邦訳、『聖書外典偽典』３、201 ページ。

41 *Oracula Sibyllina*, V, 487-488. 邦訳、『聖書外典偽典』３、201-202 ページ。

42 Justinus, *I Apologia*, 20, 1. 柴田有・三小田敏雄訳、「キリスト教教父著作集」１、教文館、1992 年、36 ページ。

43 Ps.-Justinus, *Cohortatio ad Garaecos*, 16, 1, ed.Miroslav Marcovich, Berlin New York, 1990, p.46.

44 *Oracula Sibyllina*, frg.1, 7-9. 邦訳、『聖書外典偽典』３、151 ページ。

45 Ps.-Justinus, *Cohortatio ad Graecos*, 38, 1, ed. Marcovich, p.77.

46 *Oracula Sibyllina*, III, 24-25. 邦訳、『聖書外典偽典』３、155 ページ。

47 邦訳は以下のとおり。高橋英海訳、『初期ラテン教父』、「中世思想原典集成」４，平凡社、1999 年、316-388 ページ。

48 Lactantius, *Divinae institutiones*, I, 6, 7, ed. S. Brandt, CSEL 19, 1890, pp.20-21; Lactance, *Instituions divines*, Livre 1, ed. Pierre Monat, SC 326, Paris, 1986, p.76.

49 I, 6, 8-12, ed. Brandt, pp.21-22; ed. Monat, pp.76-80. Cf.

H.W. Parke, *Sibyls and Sibylline Prophecy in Classical Antiquity*, ed. B.C. McGing, London - New York, 1988, pp.29-36.

50 Cf. Parke, op.cit., pp.76-78.

51 *Oracula Sibyllina*, frg. 1, 7, ed. Geffcken, p.227. 断片１および３については、上述したように、柴田有氏による翻訳、および今井知正氏による翻訳が存在するが、ラクタンティウスとテオフィロスのテクストを比較する関係で、以下私訳を用いる。

52 *Oracula Sibyllina*, frg. 3, 3-5, ed. Geffcken, p.230.

53 *Oracula Sibyllina*, frg. 1, 15-16, ed. Geffcken, p.228.

54 *Oracula Sibyllina*, VIII, 377, ed. Geffcken, p.166.

55 *Divinae institutiones*, I, 6, 15-16, ed. Brandt, pp.23-15; ed. Monat, p.82.

56 Cf. R.M. Ogilvie, *The Library of Lactantius*, Oxford, 1978, pp.28-33; Guillaumin, op.cit., pp. 188-189 ; Buitenwerf, op.cit., pp.82-84.

57 *Oracula Sibyllina*, frg. 1, 5-6, ed. Geffcken, p.227.

58 *Oracula Sibyllina*, III, 774, ed. Geffcken, p.87.

59 *Oracula Sibyllina*, VIII, 329, ed. Geffcken, p.163.

60 グラントの校訂版では κάτθετο と訂正されている。テクストゥス・アパラトゥスに従って、ヴァティカン写本の読みに戻す。

61 邦訳、「聖書外典偽典」６、369 ページ。

62 Cf. René Pichon, *Lactance. Étude sur le mouvement philosophique et religieux sous le règne de Constantin*, Paris, 1901, pp.209-213.

63 Cf. Ogilvie, op.cit., p.31.

64 Augustinus, *De civitate Dei*, XIII, 24, CC 48, p.614.

65 Ibid., p.615. 以下の引用に際しては私訳を用いる。

66 *Divinae institutiones*, IV, 18, 15. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 287-290, ed. Geffcken, p.160.

67 *Divinae institutiones*, IV, 18, 17. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 292-296, ed. Geffcken, p.160.

68 *Divinae institutiones*, IV, 18, 19. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 303-304, ed. Geffcken, p.161.

69 *Divinae institutiones*, IV, 18, 20. Cf. *Oracula Sibyllina*, VI, 22-24, ed. Geffcken, p.92.

70 *Divinae institutiones*, IV, 19, 5. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 305-306, ed. Geffcken, p.161.

71 *Divinae institutiones*, IV, 19, 10. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 312-314, ed. Geffcken, p.162.

72 Lactantius, *Divinae institutiones*, VII, 24, 1-2, ed. Brndt, p.658.

73 *Oracula Sibyllina*, VIII, 81-83, ed. Geffcken, p.146. 邦訳、「聖書外典偽典」６、343 ページ。

74 『ヨハネの黙示録』(20: 1-6)、『ダニエル書』(7: 9, 22, 27)、『イザヤ書』(11) を参照。

75 *Oracula Sibyllina*, frg.4, ed. Geffcken, p.232. 断片４はラクタンティウスのこの箇所から採られたものである。

76 Cf. Maury D. Feld, "The Sibyls of Subiaco: Sweynheim and the editio princeps of Lactantius," in *Renaissance Studies in Honor of Craig Hugh Smyth,* Firenze,1985, vol.1, pp.301-308.

77 Marsilio Ficino, *De christiana religione*, in *Opera omnia*, Basel, 1576, pp.26-28.

78 詳しくは、伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー　シエナ大聖堂舗床に見えるルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』、ありな書房、1992 年、を参照。

附録　ラクタンティウス『神学綱要』
第１巻６章（7-16）[1]

M・ウァロ[2]――ギリシア人たちの間でさえ、彼よりも学知に満ちた者として生を送ったものはいなかった――は大神祗官ユリウス・カエサルに宛てた『神的な事柄』（*Res divinae*）の諸巻において、十五人神官団[3]について語りながらこう述べている。「シビュラの諸巻は　人のシビュラによるものではないが、『シビュラの書』という　つの名称によって呼ばれている。というのは、古代の人々によって、女性の予言者はすべてシビュラと――デルポイのシビュラという唯　の名にゆえに、あるいは神々の告げる意図のゆえに――呼ばれていたからである。実際、アエオリア方言では、神々のことを「テオス」（θεούς）ではなく「シオス」（σιούς）と、意図のことを「ブーレー」（βουλής）ではなく「ブッラ」（βούλλαν）と呼んでいる。それゆえ、シビュラとはいわば「神意」（θεοβούλην）ということなのである。さらには、シビュラは十人いる」。そしてウァロは、そのすべてについて、個々のシビュラに言及している著作家たちのもとに数え挙げている。

「第　はペルシアの（de Persis）のシビュラで、『マケドニアのアレクサンドロスの業績』（*Res gestas Alexandri Macedonis*）を書いたニカノル[4]が言及している。第二はリビアの（Libyssa）シビュラで、エウリピデスが『ラミア』（*Lamia*）の序で言及している。第三はデルポイの（Delphida）シビュラで、クリュシッポス[5]が『予言について』（*De devinatione*）作成した書物において述べている。第四はイタリアのキメリアの（Cimmeria）シビュラで、ナエウィウス[6]が『ポエニ戦役』（*Bellum Punicum*）において、またピソ[7]が『年代記』（*Annnales*）において名を挙げている。第五はエリュトライの（Erythraea）シビュラで、エリュトライのアポロドロスが、彼女は彼の土地の者で、イリオンへの途上にあったギリシア人たちにトロイアは滅亡し、ホメロスは虚偽を書くだろうと予言した、と確言している。第六はサモスの（Samia）シビュラで、エラトステネスがサモスの人々の古い年代記の中に彼女を見いだしたと記している。

第七はクマエの（Cumana）シビュラで、アマルテアの（Amalthea）シビュラと呼ばれ、他の人々によってはヘロピレ（Herophile）やデモピレ（Demophile）と名づけられている。彼女はタルクィニウス・プリスクス王に九巻［の託宣］を持ち込み、その代金として金 300 ピリッポスを彼に要求した。王は価格の法外さに呆れて、女の狂気をあざ笑った。彼女は彼の面前で三巻を燃やして、残りの諸巻について同　の代金を請求した。タルクィニウスは女がさらに狂気に陥ったと考えた。しかし彼女がさらに三巻を焼いて、同　の代金を主張すると、王は動転して、残りの諸巻を金 300 ピリッポスで買った[8]。その後、カピトリウムが再建された時には、［託宣の］数は増していた。というのも、イタリアとギリシアのあらゆる都市から、とりわけエリュトライから集められ、シビュラの名を冠したものはすべてローマへもたらされたからである。

第八はヘレスポントスの（Hellespontia）シビュラで、トロイアの領地下、ゲルギトス市のマルメッソス[9]に生まれ、ポントスのヘラクレイデス[10]は、ソロンとキュロスの時代に生きていたと書いている。第九はピュリギアの（Phyrigia）シビュラで、アンキュラで予言した。第十はティブルの（Tiburs）シビュラで、アルブネアの（Albunea）シビュラと呼ばれ、アニオ川辺のティブルで女神として崇敬され、この川の底には書物を手にした彼女の姿が見いだされると言われる。その書物の託宣は元老院によってカピトリウムに運ばれた」。

これらすべてのシビュラの詩篇は［カピトリウムに］もたらされ、保存されたが、クマエのシビュラのものだけは例外で、その諸巻はローマ人に対しては秘匿され、十五人神官団以外の誰にとってもそれを見ることは不法であった。各々のシビュラに各々の巻が属していたが、シビュラというひとつの名のもとに記されていたので、　人のシビュラに属するものと信じられていた。それらの諸巻は混合され、区別することができず､エリュトライのシビュラ以外には、各自に固有のものを割り当てることはできなかった。エリュトライのシビュラはその詩篇の中に自らの真の名前を加え、生まれはバビロニアであるが､「エリュトライの」と呼ばれていると述べている。しかしわれわれは、シビュラの証言が有益な場合には、各シビュラについて区別することなしに語ることにしよう。

ところで、これらのシビュラはすべて、唯　の神について公言しており、とりわけ、シビュラたちの間でより著名で高貴と見なされているエリュトライのシビュラがそうである。彼女については、きわめて入念な著作家のフェネステッラ[11] が､十五人神官団について言及しながら、こう述べている｡「カピトリウムが再建されると、執政官のＣ・クリオ[12] は元老院に対して、エリュトライに使節を送ってシビュラの詩篇を蒐集し､ローマに持ち帰るように勧告した｡そこで、Ｐ・ガビニウス、Ｍ・オタキリウス、Ｌ・ウァレリウスが派遣され、個人蔵のものを転写して約　千行をローマにもたらした｣｡先に示したように、ウァッロが同じことを述べている。

使節たちがローマに持ち帰った詩篇の中には、唯　なる神についての証言が存在している。

> 唯　支配する、　人の神は途方もなく巨大で、生みだされた者ではない[13]。

これは唯　の至上の神であり、彼は天を造り、天体によって識別した[14]。

> 唯　の神だけが最も高く、天と太陽と星辰と月と、実りを結ぶ大地と海の水の大波を造った[15]。

彼は世界の唯　の建造者で、諸事物の唯　の製作者であり、諸事物は彼によって存続し、彼の内に存在しているのであるから、彼だけを崇拝しなければならない､と彼女は証言している。

> 唯　の者である彼を、世界の支配者を崇めよ。彼だけが永遠から出て、永遠に向かって存在している[16]。

同様に別のシビュラ――誰かは分からないが――は、神の言葉を人間にもたらしたと確言してこう述べている。

> というのは、私が唯　の神であり、他の神は存在しないからだ[17]。

註

1 底本としては、Lactantius, *Divinae institutiones*, ed. S. Brandt, CSEL 19, 1890 を使用し、Lactance, *Institutions divines*, Livre 1, ed. Pierre Monat, SC 326, Paris, 1986 を参照した。I, 6, 8-12, ed. Brandt, pp.21-22; ed. Monat, pp.76-80.

2 Marcus Terentius Varro (116-27 BC) ローマ共和制期の学者、詩人。数多くの著作を発表し（74 作、620 巻に及ぶ）、クインティリアヌスから「最も博学なローマ人」と呼ばれた。現存する作品は､『ラテン語論』*De lingua latina libri XXV*（25 巻中６巻）､『農事論』*Rerum rusticarum libri III*､『メニッポス風風刺』*Saturarum Menippearum libri CL*（断片のみ）があり、散逸したものには､『肖像集』*Hebdomades vel de imaginibus*､『人間と神々に関する故事』*Antiquiatatum rerum humanarum et divinarum libri XLI*､『ローマ民族について』*De gente*

populi romani、『ローマ人の社会生活』*De vita populi Romani*、『諸学科』*Disciplinarum libri IX* などがある。同時代のキケロのほか、知識の宝庫としてウェルギリウス、オウィディウスらの文学者に影響を及ぼし、アウグスティヌスらのキリスト教教父もローマの宗教や慣習に言及する際に参照している。ラクタンティウスの引用は、『人間と神々に関する故事』からのもので、10 名のシビュラについて言及している、古代の唯一のテクストである。

3 Quindecimviri sacris faciundis ローマの四大神官団のひとつで、シビュラの託宣を管理していた。最初は２名（Duoviri）、前４世紀には 10 名（Decemvir）、そして前１世紀以降に 15 名となった。この託宣はカピトリウムの丘のユピテル神殿に保管されており、緊急時に際して、元老院の求めにより参照された。

4 Nicanor アリストテレスの友人で、アレクサンドロス大王に仕えた。

5 Chrysippus (c.280 – c.206 BC) ストア派の哲学者で、前 232 年から学頭を務めた。

6 Naevius 前３世紀後半に活躍した詩人で、第一次カルタゴ戦争（264 – 241 BC）について歌った。

7 L. Calpurnius Piso 前 133 年の執政官で、歴史家。

8 ほぼ同一の逸話が、プリニウスの『自然誌』（13, 88）とハルカナルナッソスのディオニュシオスの『ローマ古代史』（4, 62）に記されている。

9 Marmessus 「マルペッソス」Marppessus の誤り。

10 Heraclides 前４世紀のプラトン派の哲学者で、アカデメイアにおいてスペウシッポスやアリストテレスと共に学んだ。

11 Fenestella ティベリウス帝時代の年代記作家（35 年頃に没）。プリニウス父によってもしばしば引用されている。ラクタンティウスは『神の怒りについて』（22, 5）においても、ウァロとともに言及している。

12 C. Scribonius Curio 紀元前 76 年に執政官職に就いていた。エリュトライに派遣された３名はおそらく十五神官団に属する者だろう。

13 *Oracula Sibyllina*, frg. 1, 7, ed. Johannes Geffcken, Leipzig, 1902, p.227.

14 『創世記』（1）を参照。

15 *Oracula Sibyllina*, frg. 3, 3-5, ed. Geffcken, p.230.

16 *Oracula Sibyllina*, frg. 1, 15-16, ed. Geffcken, p.228.

17 *Oracula Sibyllina*, 8, 377, ed. Geffcken, p.166.